

ひたちやまたにえもん 常陸山谷右衛門

近代相撲の基礎を築いた大横綱 水戸市



(茨城新聞社提供)

明治7年(1874) - 大正11年(1922)。水戸宝鏡院門前町〔水戸市城東〕生まれ。本名は市毛谷。水戸中学校〔水戸一高〕に入学するも、父の事業失敗等により3年で退学し上京。明治23年(1890), 出羽ノ海運右衛門(先代常陸山虎吉)に弟子入り。同25年(1892), 東序の口16枚目「御西山」の四股名で初土俵。同27年(1894), 西幕下に上がり四股名を「常陸山」に改める。同36年(1903), 横綱となり、以後、大正3年(1914)の引退まで、「心技体」三拍子揃った横綱として、梅ヶ谷とともに活躍し相撲人気を高める。幕内通算成績は150勝15敗22引分2預かりであった。引退後は国技館の再建などに取り組むと共に、相撲協会の発展に尽くし、近代相撲の基礎を築きあげる。

常陸山谷右衛門は、水戸下市の宝鏡院門前町〔水戸市城東1丁目あたり〕に市毛家の長男として生まれました。市毛家は代々武術に優れた家柄で、父も剣道の達人でした。そのためか、少年時代の谷右衛門も運動が得意で、腕力も強く、河原でとる相撲や水泳では、誰もかないませんでした。また谷右衛門は勉強もできたので、小学校を終えると当時の水戸中学校〔水戸一高〕に進みました。しかし、谷右衛門が中学校に入ったころから、父の水運会社の経営が傾いてきて、中学3年生の時、父の会社は倒産し、一家は破産、谷右衛門も中学を退学します。

(自分の力で、市毛家の暮らしをまた元のようにしたい。でも、いったい何ができるのだろう。そうだ、自分の体を生かす相撲取りになろう。体一つで勝負できる相撲の世界こそ、今の自分にできるただ一つの道だ。)

こう考えた谷右衛門は、「武士の子どもが相撲取りなんぞになるとは。」という父や祖父の猛反対を押し切り、同じ水戸出身の出羽ノ海運右衛門に入門します。谷右衛門は、はじめは徳川光圀(P.45参照)ゆかりの西山荘からシコ名をとり、「御西山」と名乗りました。生まれつきのしなやかなバネのような体と厳しい稽古で、谷右衛門はぐんぐん強くなり、番付も順調に上がっていきました。そして、明治27年(1894), 幕下に入るとともにシコ名を「常陸山」と改めます。一時東京を離れますが、東京相撲にもどってからは、これまで以上に稽古に打ち込みます。幕下から十両へ進み、そして明治32年(1899)に入幕、同34年(1901)には大関に昇進しました。谷右衛門が順調に出世街道を進むことができた理由の一つにライバル梅ヶ谷の存在があげられます。



常陸山の引退相撲 (茨城新聞社提供)

互いに力と技を競い合う二人の勝負によって、相撲人気はぐんぐん上がっていきました。そして明治 36 年 (1903)、谷右衛門と梅ヶ谷はそろって横綱へと昇進しました。(ついに横綱になった。しかしこれからが大切だ。技や力だけではなく、心もみがき、人々から尊敬されるような立派な横綱になろう。そして相撲が国民すべてから愛されるようにしていこう。)

そう決意した谷右衛門は、大正 3 年 (1914) に引退するまで、梅ヶ谷とともに現在のよう相撲人気の礎を築いていきます。

引退した常陸山は、出羽ノ海部屋を継ぎ、親方として多くのすぐれた弟子を育てるとともに、相撲協会の役員として、相撲界全体の発展に尽くしました。特に、火事によって焼失してしまった国技館の再建に力を注ぎ、大正 9 年 (1920)、見事に実現します。(国技館の再建は、私一人の喜びではない。相撲界全体の、そして国民全体の喜びとなってほしい。そのためにも相撲取りはただ強さを追い求めるのではなく、心も鍛え、国民から尊敬されるようにならなければならない。そしてこの国技館こそが、鍛え上げられた心と体がぶつかりあう舞台なのだ。)

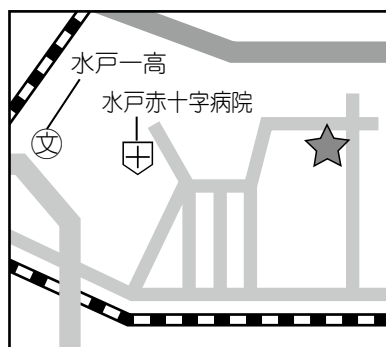
再建された国技館では、力士たちによる熱戦が繰り広げられ、連日大入り満員となり、常陸山の願いのとおり、相撲は名実ともに「国技」となっていくのです。しかし、それから 2 年後の大正 11 年 (1922) 6 月 19 日、常陸山は 48 歳で、その生涯を閉じます。その死は、相撲界のみならず、多くの国民に惜しまれました。

ゆがりのスポットに行ってみよう

常陸山生誕の地

所在地 水戸市城東 1-5, 2-1-4

内容 生誕地碑のほか、常陸山像、相撲豆知識看板が設置されています。



おもな 参考文献

『水戸の先達』(水戸市教育委員会・2000)

『郷土史にかがやく人びと』(青少年育成茨城県民会議・1971)